



帰納推論では店長は「最高気温が高いならば、客数は増える」という規則を導きました。

店長は先ほど帰納推論した規則を用いて、以下のような演繹推論を行いました。

演繹推論とは、規則や前提が正しいものとして、

これらを組み合わせて新しい結果を予測するような論理推論です。

「最高気温が高ければ来客数が増える」

- ▶ 「来客数が増えれば最高気温が高い」
- ▶ 「最高気温が高くなれば湿度は下がる」
- ▶ 「最高気温が下がれば湿度は上がる」
- ▶ 「湿度が下がれば最高気温は上がる」
- ▶ 「次の日曜日は最高気温が上がる」
- ▶ 「ならば次の日曜日は湿度が下がる」
- ▶ 「湿度が下がればジュースが売れる」

よって、

「次の日曜日はジュースの仕入れを増やそう」

Point!

演繹推論は元になる規則は正しいと仮定するので、規則を組み合わせて導いた予測であれば、形式的には正しくなります。

しかし、規則を間違えて適用すれば、間違った演繹推論になります。

【適切な疑問】

- 最高気温が高くなれば湿度は下がるが、湿度が下がれば最高気温も上がるか？
「AならばB」という規則が正しくても、「BならばA」という逆は成立するとは限りません。
- 「最高気温が下がれば湿度は上がる」と推論しているが、これは本当に妥当なのか？
「AならばB」という規則が正しくても、「AでないならBでない」という裏は成立するとは限りません。
- 「最高気温が高ければ来客数が増える」という規則が成立する条件は、
「湿度が下がればジュースが売れる」という規則の成立条件と一致しているのか？
個々の規則は正しいとしても、それぞれの規則が成立する条件が異なっていれば、それらをつなげて演繹推論しても正しい予測はできません。

【不適切な疑問】

× そもそも最高気温が高くなれば、本当に湿度は下がるのか？

組み合わせる規則そのものは正しいと仮定します。

規則そのものを疑うことは帰納推論に対する問いとしては適切ですが、演繹推論においては不適切です。

× 来客数が増えなければ、本当に最高気温は高くないのか？

BでないならAではないのではないかと疑うことは、AならばBであることを疑うことと同じで、不適切な疑問です。